

◎会いたいと思っていた友達が「故人」になっていた時の辛さ―日暮高則

小生はもう 64 歳。これまで生きてきた中で、数多くの友人ができ、そして彼らに助けられてきた。みんな思い出深い人ばかりだが、特にこの中でも忘れられない友人、先輩が 4 人いる。なぜ忘れられないかと言えば、彼らはいずれも「故人」であるからだ。

ここでは 4 人すべてを紹介する紙幅がないので、一人だけ、高校時代の親友 S・S（鈴木秀君）だけを取り上げよう。彼は高校 1 年生のときの同級生だった。背が高くハンサムで、しかも頭がいい。佐倉市の中学校時代はサッカー部のスター選手とのことで、女性にはもてたようだ。金持ちの子供にありがちな、ちょっと気取った雰囲気があったけど心の温かい男で、なぜか小生とは馬が合った。

彼と仲良くなったのは、一緒に山登りしたことがきっかけだ。よく神奈川県丹沢山塊の沢登りに出かけた。表丹沢水無川本流にある 20 メートルくらいの滝わきの岩壁を彼はするすると登って行って、上から「日暮、どうした。登ってこいよ」と声を掛けてきた。小生は、怖くて岩壁を登れず、滝の近くにある山道（通称巻き道）を歩くしかなかった。

そんな彼と高校 2 年生のとき 2 人きりで南アルプス甲斐駒ヶ岳（標高 2,967 m）に出掛けた。ちょっと無謀だったかも知れない。山小屋に泊まって頂上を制覇したのはいいが、そのあと下山途中で霧（山ではガスと言う）にまかれてしまった。早く視界が確認できるころまでと、必死になって下山しようとして急ぎ過ぎたためか下山コースから外れ、道に迷ってしまった。一寸先も見えないガスの中で、途方に暮れた。

そのとき、S 君は「よし、僕が下山ルートを探してくるから、日暮はここで待っている」と言ってすたすたと登り返して行った。小生は一人になって極端に不安な気持ちにかられ、「ひょっとしたら、僕はここで死ぬのではないか」とさえ思った。30 分くらい経つだろうか、彼はガスの中を戻ってきて「日暮、道が分かった。行こう」と言って先導してくれた。ある意味、命の恩人だ。感謝してもしきれない。

卒業後、彼は東北大学に進み、寮生活をしていた。その時も小生は仙台に遊びに行っていていろいろ世話になった。だが、2 人ともサラリーマン生活に入ると、忙しさにかまけて音信が途絶えてしまった。50 歳過ぎになって、小生もやっとな昔のことが懐かしくなり、「S 君に会いたいな。もう一度人生のことなどゆっくり話したい」と思ったが、所在が分からず、そのままにしていた。そんな折、高校同窓生向けのホームページに彼の訃報が載った。死因はガンで、還暦前の旅立ちだった。佐倉市の葬儀会場に駆け付けて、お棺の中の彼を見たときはショックだった。いつもニコニコしていたハンサム顔、ちょっと気取った風の彼のかつての面影はなく、80 歳過ぎの老人にも見えたからだ。小生は、とめどもなく涙があふれ、「生きている間に会って話したかったよ。訪ねなくてごめんね」と語りかけた。

小生がなぜ S 君と積極的に連絡を取ろうとしなかったか。それは、まだ還暦前なので、

彼も仕事が忙しいのではないだろうか。そのうち、定年を迎える 65 歳くらいになれば、ゆっくり話せるのではないかと勝手に考えたからだ。まさか死が迫っているなどとはみじんも思わなかった。少なくとも彼が病魔と闘っていた時、小生が訪ねていけば、話ができ、励ますこともできたはずだ。その点が悔しくならない。

この件で得た教訓。親しかった人、世話になった人はいつでも連絡を取れるようにし、できれば数年に一度でも会うことだ。死んでからでは、感謝の気持ちは伝えられない。友達でいたいのなら、音信を絶やしてはならない。絶えず連絡を取り合い、君のことは忘れてないよとメッセージを送ることが重要だ。(日暮も理事をしている公益財団法人「岡本国際奨学交流財団」機関紙への投稿から)